



(2)

破裂した主体を認識力で仮構したがちも一つの確固とした主体が存在しているかのように偽装し、偽装することによって常に増殖し本質的に嘘である仮構された宇宙と本能的ながつきを無数の眼、飛躍する乱雑なイメージで構成したと思われる『黄金詩篇』は、それを支えている吉増剛造の否定の情念を越えてなおわたしたちは空虚にしてゐるようにならぬか。おそらく吉増剛造に批評意識が欠陥しているなぜだろか。おそらく吉増剛造にいくばくかのアリティがある上すればそれを抜きにして語りえない。

しかしながら、盲目のラジカルズムを一面において肯定しないかぎりこの詩集は評価しないように思われる。そしてこの詩集にいくばくかのアリティがある上すればそれを抜きにして語りえない。

限りない空白のなかで自己の存在の重さを確かめることができないで、いたずらに懷疑は深まり、甫立続ける主体の情念が空虚のなかに生きている自己的の重さを懷疑の特性として懷疑する主体を疑ったとき、必然的に主体への素朴な信仰は弱らぎある後めたざと共に懷疑する主体は消滅する。しかしながら、主体への素朴な信仰が虚妄として認識されても、その虚妄を生きている主体への素朴な信仰は確立する渦が確められている。

これら素朴な主体を喪失した「主体」の情念のはげしさが『黄金詩篇』の疾走感とその緊結があるとはおもえないと飛躍し断絶する乱雑なイメージをわたしは嫌悪するが、それらを放り出す詩人の疾走する叫喚を同調しつつも嫌悪する。

一度滅びた主体は仮構の意識を持つへ「主体」として、假構のものを負としてではなく正に転化することによって否定的情念の放射を強力に推進する。しかし、ここで問題になるのは素朴な主体が滅びたとき、どのような過程を経てその仮構された「主体」を創出するかによって仮構されたへ「主体」が規定されるということである。わたしがこの詩集を嫌悪するのはまず主体の滅びの不徹底であり、不徹底のまま歌い続いていることであり、不徹底のまま「死へ死者」を語っているからである。盲目のラジカルズムのよってくるところであろうが、その不徹底

書評

ある。いかに弁解しようともナルシスである。「もうそんな疑惑は生起しない」程にナルシシズムに耽っているに過ぎない。女の死体を見、女の死人に見られる様を幻想しているのであるが「生者」としての「私」が「私」の死体と対面している訳ではない。「私の」死体への幻想は既に半端に仮構された「主體」へ生き、仮構された「主體」の絆薄さにつながっている。すでに朴素な主體への信仰は揺らいでいるにもかかわらず、それを徹底化しきっていないがために、中途半端に仮構された「主體」へ武器として言語表現を營んでいるので、「黄金詩篇」をただただ「空洞の橋上で揺れる破船」と形容するのである。

しかしながら「生者」として自らの死体を徹底化してしまったという認識がわたしに假構されるを得なくなったから、「黄金詩篇」においては仮構された「主體」と「詩」が先駆的に存在している。わたしの不満の一つに、「詩」が吉増剛造において検討されることなく、先駆的に存在してしまっていることがある。

「アコレワ／なんという薄紅色の掌にこうがる水滴／珊瑚皿に映る乳房ヨ／／転落テキナイヨ／／劍の上をツツッと走ったが消えないぞ世界！」

あまりに整合的で美しいがゆえに不満な感想がある。せめて一滴ほどでも血が欲しい、というのがわたしの望みだ。そして血が流れていないうことがこの詩集中ナルシシズムの影を与えているようおもわれる。

この詩人が時々見せる素顔もまた血が流されていないからであり、または批評意識の欠陥、日常生活におけるものもすてに素顔を通じるのかもしれない。「恋をやめている事実を見ないのをわたしは説くのだが、それを見ていなければナルシシズム」といふところ日常生活そのものもすてに素顔を欠いている事実を見ないのを説く者の夫路かもしれない。

この詩集に覗くは「宇宙的疾走感」の源泉は以上記してきた理由に多くの基るものと思われる。他に素朴に主體を信じられなくなつた仮構された「主體」が、その仮構された「主體」を保証する場として表現行為(ここで語世界)という方向にあると思われる。

ロートレ

する意識の負性を正性に転位させようとして、それをよく成しえないことからくるさらなる落感の感覚を表現しているのである。夜に浸りすぎた者が求める蜃燈の「光」の勝利を得意とする夜はまだ、内閉する意識が自分の予想をこえて「腐蝕」していくことを発明したロートレアモンの驚きである。彼はさうに深く深渊へと墜落して行く。

彼は深い孤独に陥る。疲労はますますつる一方だが眠ることもならず、逆上する憤意は望みもない時にまで深い物想いに引つて行く。そしてこの内閉者はこの想像力の驚くべきたるものである。しかしその快心は同時に、暗い呪いの不吉な潮になんどもぐり返し落ちこむことを認容しなければならない。彼は孤独のままいることに耐え得なくなり、彼に似た魂を求めて出す。だがこの内閉者はあまりに夜に没り、おのれの内部をくぐり過ぎたためであろうか、彼に近づいてくる他者を受け入れることができず、断つてしまう。

あるいは、仙者とはすなわち白昼に生息するものではあるが、また、内閉する意識者においては、常に他者は受動性においてしか見えられず、対立概念としての他者の重さに耐え得ないのである。また、内閉したのははげしい無気力と無感覚な内閉性である。そこで産み出された難船とその乗組員に対するマルドロールのイメージはその無気力、無感覚を示している。マルドロールは潤れてあがく乗組員たちを見ながら、自分の頬に「鉄の鋭い刃を突き立て」てその痛みと乗組員たちとの苦痛を比較したりする。そして彼らに呪いの言葉を投げつけ、あげくには遭難者たちが岩にたどりつこうとすると鉛を打って海のなかに戻してやるのである。そんなことを何の快樂も感じることなくやってのけた。



死の酩酊を希求しながらも書く。という意識性が介在しているがために、彼は死を皮肉としか語り得ない。死体が自慢していたそのセリフを流れる死体はマルドロールに救われ息を吹きかえすのである。彼は次のように書く。「君の死体」が自慢していたその冷静さを絶望の発作の中で保つことがない。ちなみにこのセリフは、ス川を流れる死体はマルドロールに立たされたのかも知れぬ。

とによって、おのれ自身の関係のなかに位置づけられたおのれを実の関係のなかに位置づけられたおのれをとが呼んでいるのはそのままによりおのれ自身を対象としていた抽象の彼方に位置づけ、それを証している。「第六の歌」を由志によって挙み出され、それが「第六の歌」をとが呼んでいるのはその背後に隠れる。荒涼とした抽象の彼方に自由意志そのものを現実なかに位置づけ、それをることによって「小説」たのである。作者の願はの背後に隠れる。

しても、「第六の歌」ある五の歌等に感じられるは何を語っているのである。たどりて第五の歌である。歌の男(マルドロール)こと生きて来たのに唯一死者なのです」と書く。荒涼とした抽象の彼方に感していたからであろうとは虚無の宇宙的自由性としていることを意味している。あるいは虚無耐え疲労感のことか。そうかが、そうでないかも知れない。あるいは虚無耐えて存在する精神が現実の死の歌では死の陰影が頗る。作者がおのれの現実上感していたからであらわに、涙で濡れなかつたたろうとも降らぬに袖トアラモン全集・渡辺士敏によった

（笠島敏）

池袋東口100円劇場御案内

15 21 22 28 29 /4 /5 11	<柔かい肌> <アポロンの地獄> <クリスマス・ツリー> <天使のコイン> <女王陛下の007> <獲物の分け前> <去年の夏> <砂丘>	上映中 22日迄 23 29 30 1/5 1/6 12	<橋のない川> <若者はゆく（特別興行）> <くの一化粧> <忍法忠臣蔵> <赤づきんちゃん気をつけて> <その人は女教師> <遊侠列伝> <鉄火芸者>	12月終夜 1月終夜 昭和残 宮本武蔵
--	--	---	---	------------------------------

18 <セシルの歓び> 文芸座 9422	19 <執 炎> 文芸地下 9424
-------------------------	-----------------------

始めての車でも迷なくプレイできるペニート・ゲート

特に団体（運動部・クラブ・セミナー等）で参加の方は歓迎します。